
❖ 講演会・研究セミナー ❖

若手研究者研究発表会

凡夫から仏へ—5～6 世紀の中国仏教における行位論の展開—
戦後の本願寺関係学校における宗教教育

2021 年 10 月 14 日(水) 17:00～18:30

龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室/オンライン開催 (Zoom)



発表会の様子

❖ 概 要 ❖

2021 年 10 月 14 日（木）、第 2 回若手研究者研究発表会が開催された。

講演者：魏 藝 氏（世界仏教文化研究センター基礎研究部門リサーチ・アシスタント）



魏 氏

一人目の発表者の魏藝氏は、「凡夫は如何なる修行階位を経て仏になるか」という中国南北朝時代の仏教教学の中心問いの一つに注目している。「凡夫から仏へ—5～6 世紀の中国仏教における行位論の展開—」と題した今回の発表は魏氏の博士論文の一部となる予定のものである。

発表では、上述の中国南北朝仏教の中心的問いに焦点があてられた。『華嚴経』に説かれる菩薩修行では、菩薩修行の最終段階である第十地を終えれば仏となるとされる。ところが中国仏教では、十段階の菩薩修行の前段階の修行（十住、十行、十廻向）があると解釈される。魏氏は、先行研究を引用しながら、この独特な行位論の展開は 5 世紀に成立した偽経からの影響が顕著であると議論した。

阿羅漢は原始仏教や部派仏教において悟りを開いた者として最高位に位置し、5 世紀の中国仏教でも阿羅漢の修行到達点は菩薩修行の第十地や如来と同等であるとされる。しかし魏氏は、阿羅漢が仏となるにはさらに菩薩修行を経なければならないという見方も同時代

には存在していた点を指摘する。魏氏は、様々な経典を検討し、時代が下るにつれて阿羅漢の修行到達点が徐々に引き下げられていくことを示した。例えば、菩薩の第十地と同等と目されていたはずの阿羅漢の修行到達点は、成実涅槃教学では第七地とされ、最終段階へ到達するまでにはさらに修行が必要だとされた。そして、その修行到達点は、菩薩の十段階の中でも最下位の初地、さらには菩薩修行の前段階の最下位に置かれるまでになっていく。

加えて魏氏は、この時代、一般民衆へ説かれたのは複雑で難解な修行者の修行段階ではなく、三階教や浄土教、禅宗といった信仰心や宗教実践を説くより分かりやすい教義であったことにも言及した。

講演者：山田 智敬 氏（世界仏教文化研究センター応用研究部門リサーチ・アシスタント）



山田 氏

二人目の発表者の山田智敬氏は、近代以降の学校での宗教教育に焦点を当て現在博士論文を執筆中である。今回の研究会では「戦後の本願寺関係学校における宗教教育」という題目で、博士論文の一部となる研究成果が発表された。

山田氏は今回、戦後の仏教教団、特に浄土真宗本願寺派がどのような宗教教育を展開させたのかについて、本願寺関係学校によって編集された教材から考察した。

山田氏はまず、1930～1940年代の本願寺派の機関紙などに見られる軍国主義的な言説をとりあげ、この時期、機関紙には教諭や生徒の軍国主義的な論説が多く掲載されたことを示した。ここでは「報恩の念」「報恩感謝」といた文言が使用されている。これらは宗教的概念というよりも、皇室や天皇に向けられたもので軍国主義的体制補完のためのイデオロギーであったという。

しかし、戦後7年の1952年に出版された教材では、「報恩」の思想は国家だけでなく親や教師、天地自然、三宝などを包括するようになる。人は一人で生きているのではなく、様々なものに生かされているのだと述べる点など、「報恩」の概念を仏教の縁起思想に結び付けようとする姿勢もうかがわれることが指摘された。

その後出版された教材（1974年出版、2003年出版、2012年出版）になると、「縁起」「報恩」などの仏教専門用語は日常的な表現に置き換えられるようになり、「報恩」の対象は生きとし生けるものへと広げられていくという。特に2003年と2012年に出版された教材の特徴として「食」の文脈から感謝と慚愧が語られることが指摘された。また、あるべき正しい生き方などについての明言は避けられ、生徒主導で討議させたり考えさせたりする時間を設けるような構成になっていることも議論された。さらに、仏はそばで守る存在から教え導く存在へと設定されなおされ、人間の唯一性や尊厳への言及も見られるようになっていくという。

質疑応答ではまず、発表者それぞれの扱っているテーマは違うものの、テキストが時代の中でどのように展開していくのかを読み解くという点が共通しているということが指摘された。続いて、魏氏に向けては修行階位における縁覚の位置づけはどのようなもので、どう変化していくのか等の質問があった。また、真宗学で前提としていたことがかなりの部分崩される革新的な発表であったというコメントも寄せられた。山田氏へは、戦後の教材でも戦中のような表現が使用されている点や戦中・戦後の教学と主体性の関係をめぐるコメントが寄せられた。